

## 23. 審判規定改正による柔道試合における組み手への影響

— 昭和63年と平成5年度の全日本選抜柔道体重別選手権大会を比較して —

○矢野 勝（和歌山大学） 貝瀬輝夫（東京学芸大学） 平野弘幸（講道館）  
高橋 進（関東学園大学） 服部真紀夫（和歌山大学）

### I 目的

柔道の競技化に伴い、互いがしっかりと組み合い、相手の出方を伺いながら技を施すという柔道の姿はほとんど見られなくなっている。今では激しい組み手争いの中で相手に組み手を与えず、自分が組み勝つと直ちに技をかけ僅差なりともポイントを奪おうというものに変容したと言えよう。組み手が試合の勝敗を左右する大きな要因の一つであるといえるため、近年においては、組み手争いが試合時間の大半を費やすことも珍しくない。このような現状を考えてか1989年に講道館柔道試合審判規定が、1990年に国際柔道連盟審判規定が改正され、柔道衣のサイズの規定が従来のもより大きくなった。過去において我々は、講道館柔道試合審判規定での大会において審判規定改正の組み手への影響について報告を行った。そこで今回は、国際柔道連盟試合審判規定での大会を対象に、審判規定改正による組み手に及ぼす影響について分析検討するものである。

### II 方法

#### 1. 対象とした試合

昭和63年度と平成5年度全日本選抜柔道体重別選手権大会における7階級56選手による98試合で、国際柔道連盟試合審判規定に準じて行われた。

#### 2. 分析項目

(1)組み方：各選手を「右組み」と「左組み」に分類した。

(2)組み手：施技時の釣り手の位置について「前襟、横襟、奥襟、脇、袖、肩、背、帯、ズボン、その他、なし」の11項目に、引き手の位置においては、「袖口、中袖、奥袖、脇、襟、ズボン、その他、なし」の8項目に分類した。

(3)組んでいる時間：組み合う前で全く組んでいない時間を「A局面」、2人の選手の1つ～2つの手が柔道衣を握っている間を「B局面」、3つ以上の手が柔道衣を握っている間を「C局面」、寝技に要した時間を「D局面」として分類し、立ち技に関するA～Cの局面について分析した。

(4)組み手を嫌った回数：C局面からA局面、C局面からB局面、B局面からA局面に変化した回数について分析した。

### III 結論

講道館柔道試合審判規定改正では、僅かながら組み合っている時間が長くなっていたが、国際柔道連盟試合審判規定改正では、しっかりと組み合っている時間は短くなっている傾向にあった。これは、国際ルールの罰則規定の改正により自分が組むと直ちに技を掛けるようになり、互いにしっかりと組み合って技を掛け合うという試合展開にはなり難いためと考える。